

「観光から未来を考える」

哲学者・萱野稔人といく

エコアイランド 宮古島

真っ白な砂浜に「宮古ブルー」と称される美しい海……。豊かな自然に抱かれた沖縄県・宮古島は、別名「エコアイランド宮古島」とも呼ばれているという。その理由を探るべく、社会問題に広く精通する津田塾大学教授の萱野稔人氏と島を訪ねた。

取材・文 歌岡泰宏 撮影 草野清一郎



萱野稔人(かやのとしひと)
愛知県生まれ。哲学者。津田塾大学総合政策学部長・教授。大学で教鞭をとる一方、テレビやラジオのコメントーターとして活躍。現代社会の問題を幅広く論じる。主な著書に『国家とはなにか』（以文社）、『カネと暴力の系譜学』（河出書房新社）など。

“東洋一美しい白浜”といわれる
与那覇前浜ビーチに佇む萱野教授

宮古島と伊良部島を結ぶ、全長3540mの伊良部大橋。通行無料の橋としては日本一長い。
●沖縄県宮古島市平良久貝～伊良部池間添／宮古空港から車15分



北部の西平安名崎近くでは風車3基が稼働。
●外観見学自由／沖縄県宮古島市平良久貝358／宮古空港から車30分

太陽光発電による電力を貯めておくことで、出力変動を抑える効果のあるNaS電池を見学



エコパーク宮古

島内に点在するエコ施設や電気自動車の普及など、宮古島市が取り組む実証事業を紹介。動画やパネル展示のほか、実際に家電を動かして電力を測定する体験コーナーもある。

●☎0980-76-3979／9:00～17:00、土・日曜・祝日休／無料／沖縄県宮古島市下地4743／宮古空港から車10分



上／館内では実証事業で使用されているIT機器などが展示され、取り組みの一端に触れることができる
左／宮古島で行われているエコ活動の発信拠点、エコパーク宮古

菅野's eye 宮古島では再エネだけではなく、電気自動車の普及やIT技術の活用などに力を入れ、島全体でエネルギーを持続可能なものにするために試行錯誤していることがわかった。一方で、天候などにより出力が変動する再エネは電力の安定供給面でまだまだ多くの課題があるようだ。

宮古島市



島内屈指の絶景スポット、東平安名崎では太平洋と東シナ海の雄大な景色を楽しめる。
●沖縄県宮古島市城辺保良／宮古空港から車40分

宮古島メガソーラー 実証研究設備

約10万㎡の敷地に総出力4000kWの太陽光発電設備をもつ施設。沖縄電力が、太陽光のエネルギーを電力に変換する太陽光発電とその電力を貯めておくNaS（ナトリウム・硫黄）電池のデータ解析をしながら実証実験を行っている。
●☎098-877-2341（沖縄電力）／見学は水曜の11:00～13:30（1週間前までに要予約）／無料／沖縄県宮古島市城辺福里1878-1／宮古空港から車25分

菅野's eye 再エネの普及拡大に向け、電力会社がこんなにもさまざまな実証実験を行っているとは知らなかった。なかでも不安定な電源である再エネの活用と電力の安定供給を両立させるためには、電力を貯めておくNaS電池といった大規模な設備が必要であることを多くの人が知ってほしい。

宮古島メガソーラー 展望台



屋上からは約2万枚のソーラーパネルをはじめ、宮古島の美しい海などを一望できる

宮古島メガソーラー実証研究設備に併設されている展望台。高さは8.2m。屋上には実証研究の説明板などもあり、設備や研究内容を知ることができる。また、サデフネ風力発電所も隣接しており、風車2基が稼働している。

●☎0980-73-0950（宮古島市エコアイランド推進課）／見学自由／沖縄県宮古島市城辺福里1878-21／宮古空港から車25分

菅野's eye

屋上からソーラーパネルを眺めてみて、人口約5万人の宮古島に、これほど大規模な再エネ施設があることに驚いた。宮古島は離島であるため、エネルギーの自給率を向上させる取り組みが進んでいるのだろう。これは島国である日本全体のエネルギー問題とも重なる。

台風被害を防ぐため、パネルの設置角度は5度に設定されているという

東 京から約2000km。宮古島は、年間100万人もの観光客が訪れる人気のリゾート地だ。島内には、与那覇前浜に代表されるビーチや島東端の岬・東平安名崎など、美しい宮古ブルーの海を体感できるスポットが数多くある。

宮古島を中心に大小6つの島からなる宮古島市は、平成20年に「エコアイランド宮古島宣言」を発表。サンゴの海や地下水の保全、食料資源の地産地消などに取り組み、市を挙げていつまでも住み続けられる島づくりを目指している。

特に電力を主体とするエネルギー政策には積極的だ。人口約5万人の宮古島の電力の大半を賄うのは火力発電だが、本土や沖縄本島に比べて燃料の運搬にコストがかかるうえ、供給途絶のリスクもある。島では持続可能なエネルギーの仕組み作りが不可欠となっているのだ。

そこで進められているのが、太陽光発電や風力発電などの再生可能エネルギー（以下、再エネ）の活用。島内各地にメガソーラー（大規模な太陽光発電所）や風力発電所を設置。再エネを導入しつつ、IT技術を駆使して需給を制御する新システムの構築などの実証事業も推進されている。島内をめぐるながらこれらの施設を訪ねた。



再生可能エネルギー普及の課題

～宮古第二発電所を訪ねて～



再エネ普及に取り組む、宮古島メガソーラー実証研究設備(手前)とサデフネ風力発電所(奥)

宮古島の電力システムを支える宮古第二発電所。発電所内の一般見学は不可



宮古第二発電所は沖縄電力が運営する内燃力発電所(火力発電所)。5基のディーゼル発電設備と3基のガスタービン発電設備により、宮古島と周辺の島々に電力を供給している。一方、近年宮古島では、太陽光や風力などの再エネの普及が飛躍的に拡大してきており、宮古第二発電所の役割が複雑化しているという。

そもそも電気は、停電や電気の品質低下が起こらないよう、常に消費量と供給量を一致させる必要がある。再エネは天候や時間帯によって発電出力が変動する不安定な電源であるため、発電量のバラつきを火力発電の出力を調整することで吸収し、需給バランスを維持しているのだ。しかし再エネがこれ以上増えると、宮古第二発電所の調整能力が限界を迎えるともいわれており、再エネ普及拡大による課題を抱えている。

宮古島のエネルギー問題は まさに日本のエネルギー問題の縮図

今回の取材で印象的だったのは、再エネ導入による電力の安定供給の奥深さと難しさ。太陽光や風力などの再エネはCO₂を排出しないし、燃料コストもかからない。そんな“クリーンエネルギー”としてのメリットばかりが目ざされているが、実際に私たちが使うためには、電力会社はその出力や周波数を調整するなど、見えないところで多大な努力を払っていることがわかった。もちろん地球温暖化を防ぐためなど、再エネの拡大は不可欠だが、自立した電源として安定的に利用できるようになるには、まだ道のりは遠いのではないだろうか。

宮古島は、まさに日本のエネルギー事情の縮図のような島であり、日本が向き合うべきエネルギー事情を俯瞰することができる。再エネの課題は宮古島だけの問題ではなく、エネルギー資源に乏しい島国・日本の問題として捉えていく必要性を感じた。エネルギーのことを心配しなくてもいいということは幸せなことだが、見えないところでひたむきな努力が積み重ねられた結果であることについて、私たちは関心をもつべきだと思う。人類が高度な文明や快適な生活を追求するために、エネルギーは不可欠。人類の明るい未来を描くためには、どんなエネルギーも万能ではないというところから議論していくべきと考える。



宮古島MEMO

【観光の問い合わせ】

宮古島観光協会 ☎0980-73-1881

【交通】✦那覇空港から宮古空港へ一日14便運航。東京(羽田空港)・名古屋(中部国際空港)・大阪(関西国際空港)からの往復直行便も運航。宮古空港から各所へ